様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年６月２５日現在

機関番号：２６４０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008 年～2010 年
課題番号：２０５９２６４１
研究課題名（和文）　乳児全数訪問事業を基盤としたポピュレーションアプローチによる母子保健活動の再構築
研究課題名（英文）　Report on creation of population-wide healthcare activities for mothers and their children based on universal home visit for infants project
研究代表者
時長　美希　(TOKINAGA MIKI)
高知女子大学・看護学部・教授
研究者番号：００１６３９６５

研究成果の概要（和文）：本研究は、保健師と研究者が研究と実践活動を統合させながら協働して、新たな母子保健活動をつくった。効果的な家庭訪問方法を開発し、乳児全数訪問事業を計画して実施した。子育てをしている家族へ家庭訪問することで、お母さんが自らの「育児する力」を発揮して子どもに関わり、子どもがすくすくと健やかに育つこと、その家族が自らの力を発揮して、育児に積極的に取り組み健康的な家族生活を送ることを支援することができた。

研究成果の概要（英文）：While a Public health nurse and a researcher let you integrate practice activity with a study, this study collaborated and made new maternal and child health activity. I developed an effective home visit method and I planned baby all quantity visit business and carried it out. Mother showed own ″power to take care of its baby″ by visiting the home of you and was concerned with a child, and a child being brought up in good health quickly and healthily, the family showed own power, and the family who did child care was able to support that I wrestled positively and sent healthy family life to child care.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学
キーワード：地域看護学・ポピュレーションアプローチ・エンパワーメント・母子保健活動

１．研究開始当初の背景

核家族化と少子化が進む中で、支援が得られない状況におかれている母親は、周囲から孤立し、育児不安を抱えながらも子どもの世話に追われるため、追いつめられ、産後鬱の発症ひいては児童虐待の一因となることが指摘されている。このような状況への対策として、低出生体重児、多胎児出産、病気や障害のある人、若年出産、育児困難のある人、などハイリスクの対象へのアプローチが重点的に実施されているが、集団全体に働きかけることによってリスクのレベルを下げ、問題となる現象を予防するポピュレーションアプローチの重要性は明らかである。母子保健におけるポピュレーションアプローチは、基本的な育児支援対策を充実させることによって、家族が妊娠・出産・子育てに対する不安や負担を軽減し、子育てを楽しみ、喜びを実感できるように支援することを中核として、育児を応援できる地域づくり、子どもが健やかに育つ環境整備を目指して活動することである。厚生労働省は、ポピュレーションアプローチを実施する方策の１つとして、生後４ヶ月までの新生児・乳児がいる家庭全

てを訪問し、家庭と地域社会をつなぐ最初の機会とすることにより、乳児のいる家族の孤立を防ぎ、健全な育成環境を図るための「生後４ヶ月までの乳児全戸訪問事業（こんにちは赤ちゃん事業)」を創設している。

地域における母子保健活動を推進する場合、この全戸訪問事業を実施することによって、地域の母子の実態を明らかにし、ポピュレーションアプローチを基盤とした母子保健活動を再構築することが可能であると考える。また、家庭訪問は、生活の場へケアを届けるための有効な方法であり、その人の生活の場に身をおき、その家族特有のニーズに応え、個別的なケアを提供することができる効果的な介入方法である。

以上のように、母子保健に関する実践現場の課題と考えられる「早期乳児の全数訪問事業の推進とポピュレーションアプローチによる子育て支援対策の検討と再構築」に関する事業を研究者と実践者が協働で実施しながら、成果を獲得することによって、対象となる地域の住民が安心してその人らしく育児に取り組み、子どもが健やかに発育することに貢献できる。また、この課題解決に向けた協働活動を推進する過程をアクションリサーチの視点から分析することによって、課題解決のための研究者の働きかけ、保健活動と保健師の変化を明らかにし、研究者と実践者の協働活動のあり方について提言することができ、実践と研究のサイクルの推進を図ることができると考える。

２．研究の目的

本研究は、地域看護領域の実践現場の課題を解決するために、現場の保健師と協働して活動し、課題解決に向けての成果を得ること、さらに協働活動の過程を分析し、研究者の働きかけとそれによる保健活動と保健師の変化を明確化することを目指している。具体的な研究目的は、(1)ポピュレーションアプローチによる母子保健活動を構築する、(2)母子を対象にした家庭訪問による効果的な介入方法を開発する、(3)協働活動の過程を分析し、研究者と実践者の協働活動のあり方について検討する、ことである。

３．研究の方法

(1)アクションリサーチに協力が得られ、協働活動事業を実施できる市町村を選定し、交渉と研究体制づくり、協働関係づくりを行う、(2)対象となる市町村の母子保健活動の実態を探り、ポピュレーションアプローチの必要性と方向性を確認する、(3)母子を対象にした家庭訪問による効果的な介入方法・マニュアルを開発する、(4)対象となる市町村の実情に応じた方法で、早期乳児全数訪問を計画し実施する、(5)家庭訪問の効果を評価する、(6)平成20年から22年までの協働活動の過程を分析する(実践現場とのミーティングを録音したテープ・実践現場とのミーティングに関する記録・協働活動に関するその他の記録やメモなど)、(7)データ分析の結果を統合して、研究者と実践者の協働活動のあり方の構造を提示する

４．研究成果

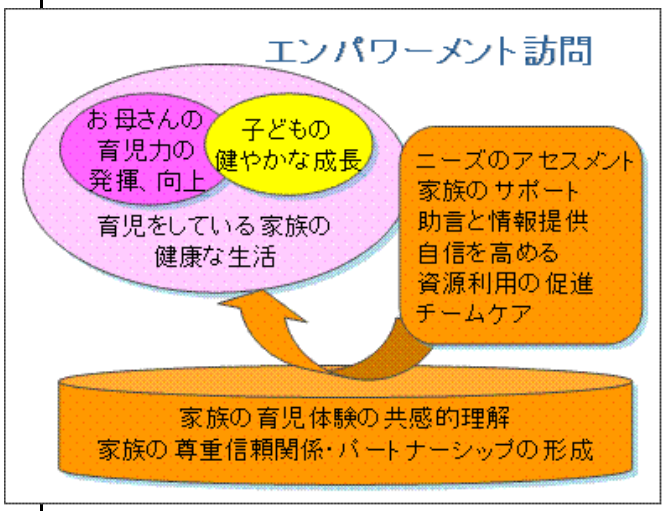
(1)市町村保健師と協働したポピュレーションアプローチによる母子保健活動の実施

①事業の目的：生後４ヵ月までの乳児のいる全ての子育て家庭を訪問し、家庭と地域社会をつなぐ最初の機会とすることにより、子育て家庭の孤立を防ぎ、乳児の健全な育成環境の確保を図る。

②事業内容：生後４ヵ月までの乳児のいる全家庭を対象に、事業を実施するための研修を修了した訪問指導員(保健師・看護師・助産師)による訪問を実施する。訪問結果によっては、適宜ケース会議等を行い、専門的判断応じて、育児支援家庭訪問事業をはじめとした適切なサービス提供や地域の社会資源に結び付ける。

(2)エンパワーメント訪問

エンパワーメント訪問は、子育てをしている家族への家庭訪問を行い，お母さんが自らの「育児する力」を発揮して子どもに関わり、子どもがすくすくと健やかに育つこと、その家族が自らの力を発揮して、育児に積極的に取り組み健康的な家族生活を送ること、を目的としている。また、エンパワーメントの考え方を基盤にして、家族の育児体験を共感的に理解し、家族を尊重しながら信頼関係を築き、パートナーシップを形成する。そして、その家族のアセスメントとニーズに基づいて、家族をサポートし、助言し、情報を提供し、自信を高める支援を行う。

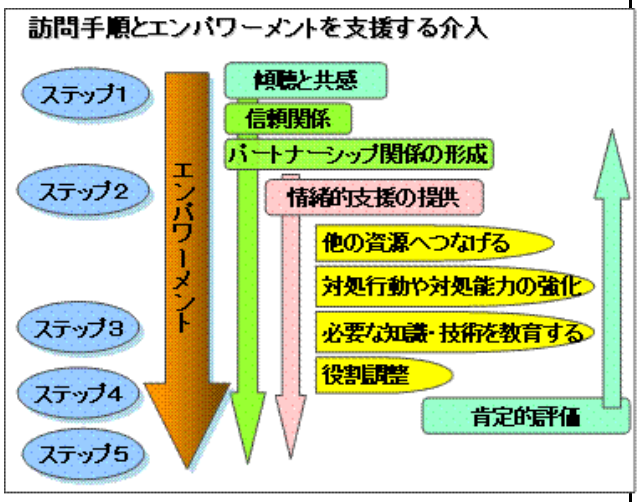


①エンパワーメント訪問マニュアルの作成

エンパワーメントの考え方を基盤とした「エンパワーメント訪問マニュアル」(34 ページ)を保健師と大学とで協働作成した。マニュアルは、エンパワーメント訪問の手順をステップごとに整理した内容（ステップの目的、チェックポイント、アセスメントと支援の考え方）を中核として、事業の全体像や、助言事項、参考資料などで構成した。

②エンパワーメントを支援する介入

訪問した家族のエンパワーメントを支援するために、まず「傾聴と共感」「信頼関係」「パートナーシップ関係の形成」という介入を基盤として関係を構築し、家族への「情緒的支援」を継続する。また、家族や子どもの健康問題やニーズを把握して、「他の資源につなげる」「対処行動や対処能力の強化」「必要な知識・技術を教育する」「役割調整」という介入を実施する。これらの介入は、全ての対象者に実施するのではなく、訪問したケースの必要性に応じて、実施する場合と実施しない場合がある。そして、家族に「肯定的評価」を提供しながら、育児を充分認め、子どもの成長を一緒に喜び、元気づけてエンパワーメントを強化する。

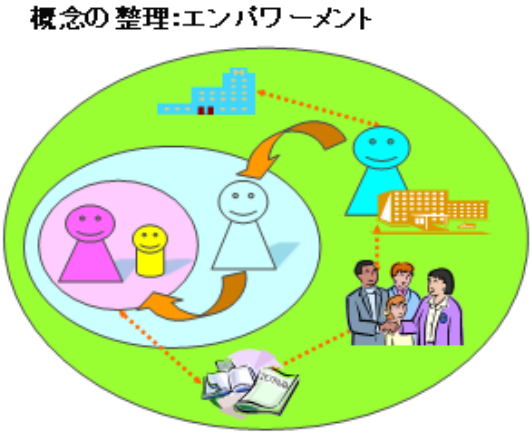


③エンパワーメント訪問のステップ

エンパワーメント訪問は、5 つのステップから構成されている。ステップ 1 は「情緒的支援を中心とした母親のエンパワーメント」、ステップ 2 は「母子の状態を理解して母親をエンパワーメント」、ステップ 3 は「児の成長を一緒に確認して、必要な知識・ケアを提供してエンパワーメント」、ステップ 4 は「児の成長の肯定的評価、母親の育児を肯定的に評価して母親をエンパワーメント」、ステップ 5 は「訪問のまとめ」である。それぞれのステップに応じて、エンパワーメントを支援する介入を組み合わせながら訪問を実施することによって、家族と子どもをエンパワーメントする。

④エンパワーメント概念

この乳児全数訪問事業は、エンパワーメントという概念に基づいて企画・実施した。エンパワーメントは、人は皆生まれながらに様々な素晴らしい力を持っているという信念から出発する考え方である。自分の中にあるその力の存在に気づき、その力を豊かに育て、他の人との関係の中でその力を活用していくことによってエンパワーメントが発展していくという考え方に基づいている。この事業においては、子供とお母さんのエンパワーメント、訪問指導員のエンパワーメント、市民全体・母子ケアシステムのエンパワーメント、という 3 種類のレベルのエンパワーメントがあり、子供とお母さんへのエンパワーメント訪問を中核として、コミュニティエンパワーメントへと発展していくことができると考えた。すなわち、訪問指導員は、赤ちゃんの生まれた家庭を訪問することによって、子供と家族のエンパワーメントを支援する。そして、訪問指導員は、保健所が行う研修会やミーティングにおいて、保健師のサポートや訪問指導員相互のサポートを得ることで、知識や技術を獲得し、相互にエンパワーメントを発展させる。さらに、この事業を推進していくプロセスにおいて、関係機関と連携し、市民に対して事業が浸透していくことによって、市民全体に育児に対する理解が深まり、子供やお母さんを大切にする意識や地域で子供を育てる活動が作られる、関係機関のネットワークが広がる、などのコミュニティのエンパワーメントに発展する。



(3) 乳児全戸訪問事業における支援の効果

開発したエンパワーメント家庭訪問による介入方法を用いて、乳児全戸訪問事業を実施した。全数訪問によって得られたデータか

ら母子の実態の一部と介入方法に関する評価について分析した結果を示す。

①アンケート量的データの分析

【こどもについて】

男児 181 名(51.9%),女児 167 名(47.9%)であり,月齢は,生後 1 ヶ月の児が最も多く 185 名(53.0%),次に 2 ヶ月の児 152 名(43.6%)で,2 か月以内の児が 97.4%を占めていた。児の出生順は第 1 子が最も多く 173 名(49.6%),第 2 子が 134 名(38.4%),第 3 子 37 名(10.6%)であった。

【家族について】

<母親の年齢>は 19～42 歳であり,平均年齢 30.9 歳(SD=±4.6)であった。<母親の健康状態>について[よい]と回答した者は,妊娠中は 203 名(58.1%)と 60%未満であったが,現在は 249 名(71.3%)であり,現在の健康状態は[よい]と[普通]を合わせると,338 名(98.5%)にのぼり,妊娠中よりも現在の体調がいいと感じる母親の割合が多くなっていた。<日頃の育児>で[ゆったりした気分で子どもと過ごす時間]があるかという問いについては,[はい]278 名(79.7%),[どちらでもない]58 名(16.6%),[いいえ]9 名(2.6%)であった。

【育児に関して気になっていたこと】

18 項目(and その他 1 項目)について複数回答で該当するものを選択してもらった。最も気になっていると回答した者が多かった項目は,[子どもの体重増加について]201 名(57.6%)であり,ついで[母乳やミルクに関することについて]171 名(49.0%),[子どもの発達について]140 名(40.1%)であり,子どもの成長発達に関する項目であった。

【訪問について】

今回の訪問に満足しているかを 5 段階評価で問う質問では[とてもそう思う]255 名(74.6%),[ややそう思う]69 名(20.2%)で,合わせると 90%を超えていた。また,母親のエンパワーメントに関する 13 の質問項目について 5 段階評価で回答してもらった結果,[こどもの成長が確認できた]は,[とてもそう思う]260 名(74.7%),[ややそう思う]79 名(22.7%)であった。また,[育児をこれからも頑張ろうと思えた][気がかりなことについて相談できた][ひとりで悩まなくていいと思えた]という項目も,[とてもそう思う][ややそう思う]と回答した割合が 90%を超えていた。

②アンケート自由記載項目の分析

訪問時の支援に対する意見として、【話ができた】【尊重してもらえた】【児の健やかな成長発達が確認できた】【相談できた】【知識や情報が得られた】の５つがあった。訪問の効果に関する意見として、【子育ての助けが得られた】【楽な気持ちになれた】【子育てに肯定的になれた】【子育ての価値が高まった】の４つがあった。制度・サービスの評価に関する意見として、【訪問サービスの評価】【制度への意見･要望】に大別された。訪問サービスの評価として〈家庭訪問サービスの受け止め〉〈訪問での支援の評価〉〈訪問員の評価〉〈子育て支援サービスとしての評価〉の４つの視点から意見が寄せられていた。

利用者の意見から確認できた支援内容は、話し相手となること、対象者の尊重、児の健康状態及び成長発達の確認、そして、相談的対応と知識・情報の提供であった。これらの支援は訪問手順に含まれていることから、手順で示された支援が訪問員によって確実に提供され、支援として利用者に受け止められていたことを表している。また、児の健康状態及び成長発達の確認や、知識・情報の提供を含めた相談的対応は、従来の乳幼児及び産婦訪問事業の目的であり、乳児全戸訪問事業においても、この目的を達成するための支援が行われていることが確認できた。さらに、【話ができた】【尊重してもらえた】が意見として挙げられていたことは、訪問によってエンパワーメントを意図した支援が充分提供されていると考えられた。

(4)研究者と実践者の協働活動の構造

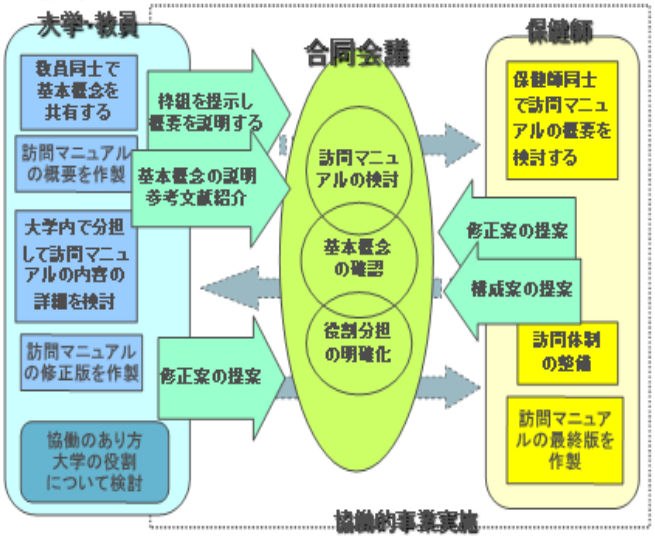
研究者と実践者の協働活動について検討するために、会議の記録・議事録、会議の録音テープの逐語録、協働活動に用いた記録、研修会での記録・評価をもとにして、協働活動の全体像について分析した結果を以下に示す。

協働活動を推進していくためには、合同会議を中核にして、基本概念の共有、役割分担の明確化を行いながら、研究者と実践者が試行錯誤しつつ協働活動を行っている全体像が明らかになった。具体的には、養成講座の企画・実施に関する協働活動、訪問マニュアル作成における協働活動について、それぞれの全体像が明らかになった。

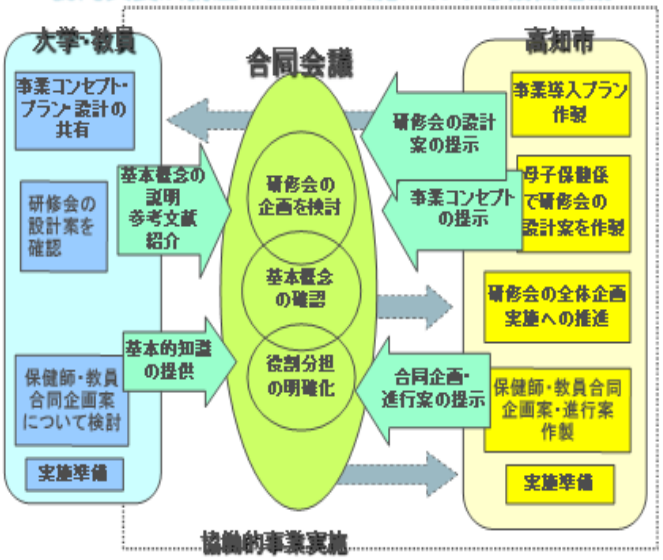
合同会議においては、＜基本概念の確認＞＜役割分担の明確化＞＜訪問マニュアルの検討＞＜研修の企画の検討＞を協働で行いながら事業を推進していた。大学内では、＜事業コンセプト・プラン・設計を共有する＞＜教員同士で基本概念を共有する＞ことを繰り返しながら、具体的な事業推進のための活動として、＜訪問マニュアルの概要を作製する＞＜分担して訪問マニュアルの内容に関する詳細を検討する＞＜訪問マニュアルの修正版を作製する＞＜研修会の設計案を確認する＞＜保健師・教員合同企画案について検討する＞＜研修会の実施準備をする＞ことを実施していた。また、大学内ミーティングの場面では、＜協働のあり方・大学の役割について検討する＞ことを繰り返し行っており、どのような協働活動のあり方を目指していけばいいのかについて考えることが、

重要なことであると捉えて試行錯誤していた。そして、合同会議の場では、＜枠組を提示し概要を説明する＞＜基本概念の説明・参考文献紹介をする＞＜基本的知識を提供する＞ことを担っていた。一方、実践者は、保健師のみならず母子保健係全体で、＜事業コンセプトの提示＞＜事業導入プラン作製＞＜合同企画・進行案の提示＞＜研修会の設計案の提示＞を行い、事業の方向性を示した。また、具体的な事業推進のための活動としては、保健師が中心になり、＜保健師同士で訪問マニュアルの概要を検討する＞＜訪問体制を整備する＞＜訪問マニュアルの最終版を作製する＞＜研修会の設計案を作製する＞＜研修会の全体企画を推進する＞＜保健師・教員合同企画案・進行案を作製する＞＜研修会の実施準備をする＞ことを行っていた。

訪問マニュアルの作成プロセスにおける協働活動



訪問員養成講座の企画・実施における協働活動



(5)考察・今後の展望

①訪問の効果

野嶋らはエンパワメントを「能力を開花するプロセス」と定義しており、評価の枠組みとして、オープン性の高まり、能力の開花、現実に立ち向かう意欲の芽生え、生活の質の改善、自己決定、満足、希望の感覚、自己成長、コントロール感という９項目を提示している。この９項目それぞれを本研究の結果と照らし合わせると、〈交流や外出に積極的になれた〉〈家族の協力の促進になった〉はオープン性の高まりに含まれ、また、能力の開花は、〈新たな発見が得られた〉,〈改めて子育てについて考えられた〉が含まれていた。以下、現実に立ち向かう意欲の芽生え：〈子育てを頑張ろうと思った〉、生活の質の改善：〈児がより愛しくなった〉、自己決定：〈適切な助言が得られた〉、満足：〈子育てに自信がついた〉、希望の感覚：〈明るい気持ちになれた〉〈楽しく育児したいと思った〉〈前向きになれた〉、自己成長：〈母親の実感がわいた〉、コントロール感：〈不安が軽減・解消した〉,〈今後困った時の相談先がわかった〉と、9項目すべてに対応する支援が確認できた。このことから、乳児全戸訪問事業は、利用者のエンパワメントを多面的に促進しており、育児支援として効果的な支援方法であると思われる。子育て支援における保健師の目標は、育児者自らが子どもや家族に適した育児を判断し自身を持って取り組めること、必要な時に自らサポートを求め活用できること、そして、子育てに適応した個々の家族の新しいライフスタイルを形成することの３つである。これに基づくと、育児おいてエンパワーされるべき能力とは、問題や状況に対する判断力、自信、サービスやサポートの活用能力、生活の再形成能力などが挙げられる。母親をはじめとする家族自身が自分たちの対処能力向上を実感することにより、自信がつき、育児不安が軽減されるものと考えられる。つまり、育児不安軽減のプロセスは、エンパワメントのプロセスと重なっている。

②乳児全戸訪問事業の活用による効果的な母子保健活動のあり方

本事業は、個々の家族のエンパワーメントをコミュニティ・エンパワメントへと拡大することを目指している。家庭訪問の対象になった母親たちは、自分にとっての訪問事業の意味だけでなく、他の子育て中の母親にとっての訪問事業の意味に関する意見をアンケートの自由記載のなかで多数回答していた。このように、地域で生活する他の母子を意識できたということを考えると、母親たちに事業の意義や効果を考えてもらうことは、同じ地域に生活する親子の連帯感の育成を図ることにつながり、コミュニティ・エンパワー

メントに通じる可能性がある。また、全数訪問実施の効果には、受け持ち地区の対象把握、住民からの相談回路の拡大、家族の健康問題への対応、家庭訪問以外の資源利用の促進など、訪問対象世帯への支援に関する効果に留まらず、地区活動における効果も確認されている。個々の家庭に関わる機会を地域全体の活動につなげることを意識した訪問活動の展開が今後も重要だと考えられた。

また、保健師は、「広報活動で、ポスターを各医療機関に配布する際、臨床（産科外来・産科病棟・NICU）スタッフと情報交換するなかで、活動の場は異なっていても『目指す方向は同じ』だと実感した。それを契機に、情報交換・交流の場として定期カンファレンスを計画し実施している。保健師が行っていた家庭訪問で気になるケースの情報提供を臨床スタッフから受け、問題の解決に向けてリアルタイムで訪問に生かされた。訪問員にも情報提供し活動に役立てることができる。」と語っており、関係機関と新しい連携の形が生まれている。また、地域子育て支援センターとの連携の方向に関しても、訪問員が担当地区の情報収集のために「地域子育て支援センター」を見学したことを契機に、子育て支援センター側もこの事業に関心を寄せており、情報交換や地域活動など協働の方向性を提案された。また、市民に対しては、テレビ、新聞、コミュニティ誌などメディアを通じて広く広報を実施し、関心、反響がよせられている。以上のように、この事業の地域への広がりを基盤としてコミュニティ・エンパワーメントへ拡大できる母子保健活動を今後も検討し、実施していくことが可能である。

(6)引用・参考文献

1. 北山三津子,平山朝子,山岸春江他：後期老年人口群に対する全数訪問.千葉大学看護学部紀要,11,p27-31.1989
2. 野嶋佐由美(1996)：エンパワーメントに関する研究の動向と課題. 看護研究 (6)p453-4642.
3. 野嶋佐由美,中野綾美(1996):家族エンパワーメントをもたらす看護実践.へるす出版
4. 藤内修二：なぜ，今ポピュレーションアプローチなのか，保健師ジャーナル,63 (9)，医学書院，756-761， 2007
5. 来生奈己子：レクチャー編　生後４ヶ月までの全戸訪問事業「こんにちは赤ちゃん事業」の創設，保健師ジャーナル，63 (9)，医学書院，762-765， 2007
6. 原田正文：親支援プログラム“Nobody’S Perfect”とは？日本の親にぴったり！虐待予防に２もなるプログラム，保健師ジャーナル，63 (9)，医学書院，774-777， 2007
7. 藤内修二：なぜ、いま、コミュニティエンパワメントなのか？，保健師ジャーナル，62 (1)，医学書院，08-09， 2006
8. 安梅勅江編著　：コミュニティ・エンパワメントの技法　当事者主体の新しいシステムづくり，医歯薬出版，2005
9. 社団法人　日本看護協会：平成 18 年度先駆的保健活動交流推進事業　新やってみよう!ポピュレーションアプローチ，社団法人日本看護協会，2007
10. 中山貴美子他：研究者の働きかけによる保健活動と保健師の変化－難病保健活動を改善したアクションリサーチ事例より－，日本地域看護学会誌，7 (2)，33-39，2005

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計１件）

発表者：Miki Tokinaga，Michiko Kawakami, Ayami Nakano，Mio Sato, Aki Nakagawa, Tomoko Kitamura, Kazuko Murakami, Akiko Kanzaki

発表表題：First report on creation of population-wide healthcare activities for mothers and their children based on universal home visit for infants project - Development of Empowerment Visits

学会名：The 1st International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science

発表年月日：2009 年 9 月 19 日

発表場所：神戸国際展示場

６．研究組織

(1)研究代表者:

時長　美希(TOKINAGA MIKI)
高知女子大学・看護学部・教授
研究者番号：００１６３９６５

(2)研究分担者:

中野　綾美(NAKANO AYAMI)
高知女子大学・看護学部・教授
研究者番号：９０１７２３６１
川上　理子(KAWAKAMI MICHIKO)
高知県立大学看護学部准教授
研究者番号：６０３０５８１０
益守　かづき(MASUMORI KAZUKI)
高知女子大学・看護学部・准教授
研究者番号：２０２３８９１８
佐東　美緒(SATO MIO)
高知女子大学・健康生活科学研究科・研究員
研究者番号：２０３６４１３５